



Hospital Data

医療法人社団 三喜会 鶴巻温泉病院

<http://www.sankikai.or.jp/tsurumaki/>

所在地 神奈川県秦野市鶴巻北1-16-1

電話 0463-78-1311

診療科目 内科、リハビリテーション科、神経内科、歯科

「重症の患者さんの受け入れが多い」というのが当院の特徴の一つです。当院の入院患者は横浜・川崎・東京からの紹介である。原因疾患は脳卒中が7割を占め、次いで大腿骨骨折や廃用症候群などとなっています。私は、そうではないと思う

全国平均の68点よりだいぶ下回っていますが、それでも在宅復帰率は70%以上を達成しています。できるだけ長く急性期病院に居たほうがよいとお考えの方が多いようですが、私は、そうではないと思つ

鶴巻温泉病院

充実したリハビリと在宅療養支援で「人生の満足度」の向上をサポート

東京・新宿から小田急線で約1時間、丹沢山系のふもとにある鶴巻温泉。駅から徒歩3分の場所にある鶴巻温泉病院は、全国でも有数の規模となる回復期リハビリテーション病棟(206床)のほか医療療養病棟(120床)、介護療養病棟(120床)、緩和病棟(25床)などを擁する多機能のケアミックス型病院である。鈴木龍太院長にその取り組みをお伺いした。

早期のリハビリ開始で在宅復帰率を上げる
回復期リハ病棟は206床。入院は多くが近隣の湘南地区と神奈川県西部の急性期病院からの紹介だが、三分の一程度は横浜・川崎・東京からの紹介である。原因疾患は脳卒中が7割を占め、次いで大腿骨骨折や廃用症候群などとなっている。

「重症の患者さんの受け入れが多い」というのが当院の特徴の一つです。当院の入院患者は横浜・川崎・東京からの紹介である。原因疾患は脳卒中が7割を占め、次いで大腿骨骨折や廃用症候群などとなっている。

当院では、発症後2週間前後の患者さんも受け入れ、入院初日からリハビリを開始しています。いわゆるリハビリ難民になりがちな重症者を受け入れて、高いリハビリ効果を上げています」と鈴木龍太院長は語る。

回復期リハビリの目的は、歩行や食事、用便など、日常生活に必要な動作(ADL)ができるようになります。それにはリハビリの質と量が大いに関係する。同院の回復期リハビリテーション病棟では一日最高9単位(3時間)のリハビリを365日受けることができる。また、現在、リハビリ専門スタッフとして、理学療法士106名、作業療法士65名、言語療法士40名、レクリエーショントレーナー15名(音楽療法や園芸療



院長 鈴木 龍太

●すずき・りゅうた／東京医科歯科大学医学部卒。医学博士。昭和大学藤が丘病院脳神経外科准教授を経て、2009年より現職。日本脳神経外科学会認定脳神経外科専門医、日本リハビリテーション医学会認定リハビリテーション科専門医、日本慢性期医療協会理事、日本リハビリテーション病院・施設協会理事。



回復期リハビリ病棟でのチームカンファレンス

看護師、薬剤師、管理栄養士、介護福祉士、ソーシャルワーカーなどとともに、一人ひとりの患者さんと家族に最適なプランを作成して、在宅復帰に向けてリハビリを実施している。重症の患者を受け入れ、早期リハビリが可能なのも、これら経験豊富な専門職スタッフのチーム医療の力によるところが大きい。

く早く回復期リハ病棟に転院して本格的にリハビリを始めたほうが日常生活動作(ADL)の回復に有効で、在宅復帰率も高くなる傾向にあります。当院では、発症後2週間前後の患者さんも受け入れ、入院初日からリハビリを開始しています。いわゆるリハビリ難民になりました。同院が力を入れている「支援の柱は二つです。一つは、訪問による支援で、作業療法士とソーシャルワーカーやケアマネージャーが入院中から患者さんの自宅を訪問し改修や地域との連携などのアドバイスをしたり、訪問リハビリ、訪問栄

また、在宅復帰率を高めるために、同院が力を入れている「支援の柱は二つです。一つは、訪問による支援で、作業療法士とソーシャルワーカーやケアマネージャーが入院中から患者さんの自宅を訪問し改修や地域との連携などのアドバイスをしたり、訪問リハビリ、訪問栄養指導、訪問歯科などを実施しています。もう一つは、入院による支援で、退院後、リハビリが不十分でADLが下がってしまった場合は一時的に入院して短期集中プログラムを実施したり、ご家族の負担を軽減するレスパイト入院なども積極的に受け入れています」

在宅応援外来入院プログラムやレスパイト入院は県下でもいち早く取り組み、患者と家族の満足度の向上に努めている。

退院した患者さんたちの声を集めめた冊子『ありがとうございます』には、「毎日先生が回診に来て親しく話しかけてくれたこと、そして、スタッフのみなさんに元気よく声をかけてくれたことが励みになつた、高齢で身体が思うように動かないのに懸命に接してくれた」といった言葉が並ぶ。

「ありがとうございます」と言つてくださる患者さんがいることが私たちの励みです。これからも「ありがとうございます」と言ってもらえる病院であり続けたいと思います」と鈴木院長。リハビリは人間らしく生きる権利の回復であり、患者さんの最良の人生のために出来る限りの支援をしていきたいという意識が全職員に定着している。